

## JSTH薬剤師部会企画 JSTH Session 4

### JSTH-4 アスリートとしての渡航とメディカルスタッフとしての渡航 ～デフリンピック日本開催への想い～

#### Travel as an athlete and travel as a medical staff -Thoughts on hosting the Deaflympics in Japan-

オーガナイザー：長谷川 充（帝京大学医学部附属病院）

座長：長谷川 充（帝京大学医学部附属病院）

#### 概要

デフリンピックをご存知でしょうか？

デフというのは、英語で「耳が聞こえない」という意味で、デフリンピックは「ろう者のためのオリンピック」です。そのデフリンピックが2年後の2025年11月に東京で開催されます。デフリンピックの歴史はパラリンピックよりも古く、1924年にフランスのパリで第1回が開催され、オリンピックやパラリンピックと同じように4年に一度開催されます。

今回、日本で初めて開催される東京大会は、第25回大会で100周年の記念大会となります。

デフリンピックに3大会連続で出場している早瀬久美先生。先天性の難聴でありながら薬剤師になることを諦めず、薬科大学を卒業後、国家試験に合格し薬剤師免許を申請しましたが、欠格条項を理由に却下されました。その後は、欠格条項の見直しを求め活動を続け、欠格条項撤廃にご尽力され、聴覚障害者で初めての薬剤師となりました。普段は病院薬剤師として大学病院で勤務する一方、マウンテンバイクの選手としてもデフリンピックでメダルを獲得するなど、薬剤師とアスリートの二刀流として活躍されています。またデフリンピックでは選手としてだけでなく、スポーツファーマシストという薬剤師の専門資格を活用しメディカルスタッフとしても参加されています。

これまでの渡航時における経験やろう者としてご苦労されたこと、2025年デフリンピック東京開催への熱い想いを発信していただきます。

### JSTH-4-1 アスリートとして、メディカルスタッフとしての渡航 ～2025東京デフリンピックへの想い～

#### Traveling as an athlete and as a medical staff ～ Thoughts on holding the 2025 TOKYO Deaflympics ~

早瀬 久美

昭和大学病院 薬剤部

2001年薬剤師法改正により聴覚障害者として初めて薬剤師となった。当時社会的に課題となっていたのは医療機関における情報保障。聴覚障害者はコミュニケーションの問題から受診を避ける傾向があり、聴覚障害者が行きやすい医療機関を目指して聴覚障害者外来の設置や服薬指導に取り組んでいた。その中でデフアスリートからの相談が増えた事によりアンチ・ドーピング分野にも関わる。一般のスポーツ界でもアンチ・ドーピング関連の情報が乏しい状態であったが、2009年から始まったスポーツファーマシストの認定資格を取得し、夏季・冬季合わせてデフリンピック8大会のメディカルスタッフとして日本選手団携行医薬品の管理を担当2013年デフリンピックから自転車競技選手として3大会連続出場。日本代表選手とメディカルスタッフとの立場でデフリンピックに関わってきた経験から、デフアスリートにとってのメディカル環境のあり方について考察していく。